

《公開講演会記録》

『二人のヨシコ』

——人のアイデンティティーとは？

藤原 作弥（当協会理事）



今日は「二人のヨシコ」というタイトルで、山口淑子と川島芳子のお話をします。川島芳子が、昭和23年に銃殺刑にされずに生きていたのではないか、という噂は以前からあります。私は最近も山口淑子さんと、川島芳子のことをよく話すのですが、山口さんは「やっぱりお兄ちゃんは生きていたのかしら？」というんですね。山口さんは13歳年上の川島芳子のことを「お兄ちゃん」と呼んでいました。2人が天津で会った時に川島芳子は断髪姿の男装でした。「君もヨシコか。同じ名前だね」ということから2人の出会いは始まりました。日本と中国でいろいろ交差する関係が2人にはあったのです。

信州の松本市で木材輸入会社をやっている穂荻甲子男さんという方が川島芳子博物館とでもいうべき「川島芳子記念館」をつくっています。川島芳子の遺品や書いたものなど、穂荻さんが入手できたものを全て展示しています。

松本は、川島浪速なみわが生まれて亡くなった土地です。川島浪速という大陸浪人の養子になったのが、肅親王第14王女、愛新覚羅顯玪けんし、イコール川島芳子ですが、東珍、金璧輝とも呼ばれていました。

辛亥革命から今年はずうど100年の記念の年ですが、1911年に清朝が倒れて、翌年、肅親王は「これで清朝を絶やすのは残念だ、復辟したい」と念願

し、亡命しました。亡命したといっても、天津から旧満州の旅順に移ったにすぎません。そこで亡命生活を送って、清朝の復辟運動、再興運動をやりました。

それに賛成してサポートをした日本の志士または満洲浪人と言われるシンパサイザーが何人もいまして、そのグループのリーダーの1人が川島浪速でした。

女真族、満州族はモンゴル族と親戚関係にあります。清朝時代は皇帝の奥さんのうちの一人は必ずモンゴル人からお嫁さんをもらうという習慣も確立しておりました。ですから当時、「満蒙」と称して満州と蒙古が一体になって、ソ連の支配下で世界2番目の共産主義国になって

しまったモンゴル人民共和国、いわゆる外モンゴルとは別な、モンゴルと満州の一体となった国を造ろうという動きがありました。

いずれにしても信州の松本は川島芳子にとって青春の土地でした。肅親王と清朝復辟の誓いを立てた川島浪速は、肅親王家の財産の管理までするほど、非常に仲のよい関係になりました。同志として遇されていた関係から、「中国のしきたりで義兄弟の契りを結ぶ。義兄弟の契りを結べばお互いの子どもはお互いの子どもであるとみなす」ということになるわけです。

肅親王は本当に「うちの東珍を養子としてあなたが育ててください」と、愛新覚羅顯玪を養女に出しました。愛新覚羅顯玪は「川島芳子」という日本人として川島浪速の娘として、日本で生活するようになった。

最初は東京・赤羽の豊島師範学校の尋常小学校に入って、それから上級に進学し、松本高女の生徒になりました。松本で生活をしたわけです。川島芳子は非常にかわいい少女でしたので、みんなに愛され、日本人のボーイフレンドも何人かでき、うわさになったケースもいくつかあります。



軍服姿の川島芳子

川島芳子生存説

川島芳子生存説というのは、昔からありまして、私が山口淑子さんの伝記を書く時に、山口淑子さん本人も「本当は生きていたんだという噂もあるのよ」と言っていましたし、上坂冬子さんが書かれた川島芳子の伝記にも出てきます。川島芳子は金の延べ棒を賄賂に使って、北京の第一監獄から逃がしてもらって、病気で余命いくばくもない別の人が代わりに銃殺されたというのです。

銃殺されたとされるのは昭和23年で、翌年に共産中国が誕生しますが、生存説ではそのころこう訴え出た人がいたそうです。「私はあの川島芳子の身代わりになった女性の保護者だけでも、私のところに金の延べ棒10本やるから、身代わ

りにしてくれて頼まれた」と。

しかし実際にもらったのは4本で、契約違反だというわけです（笑）。どうも眉唾ものでしたので、うやむやになり、生存説があるというぐらいで時が過ぎていきました。

その後も生存説はずっとありまして、松本の穂苺さんは、時々、中国でこういうような説が出たとか、地方の新聞にこういう記事が出たとコピーを送ってくださいます。雲南省の山奥、シャングリラのような桃源郷に密かに川島芳子は隠れているという説が一番信憑性が高いのではないかと穂苺さんはおっしゃっていました。私はそのいただいた情報を私なりに咀嚼して、山口淑子さんに手渡していました。

生い立ち・活動・恋愛

川島芳子は1907年に生まれ、1915年に、川島浪速の養女になり、日本に来ました。学校に通った後、旧満州、北京、上海など、日本と中国の間を往復して過ごしておりました。1927年に、満蒙復辟のモンゴル人としてのリーダーだった、パプチャップという人物の息子、カンジュルジャップと結婚します。

カンジュルジャップは川島浪速の養子のような身分で、田中なにかしという名前、日本の学校に通いました。今の新宿高校です。旧制中学、日本の陸軍士官学校も卒業しています。パプチャップは内戦で戦死しますが、カンジュルジャップとジョンジュルジャップとノーナイジャップの3人の息子に自分の夢を託しました。日本人といっしょに、清朝復辟を実現し、そしてモンゴルにも独立国を建てようという民族自立の志のために、カンジュルジャップを川島浪速に預けて、日本の学校に通わせました。

カンジュルジャップは川島芳子と3年で離婚しますが、ずっと満州国軍にいてモンゴル人部隊のトップクラスの中將まで昇進しましたし、弟のジョンジュルジャップもそのくらいまでいきました。三男のノーナイジャップは、ソ連の教育を受け、モンゴル人民共和国に亡命したと伝えられています。2人の息子は日本に協力して我が民族の将来を考えさせる。日本があてにならない場合に備えて3男は、モンゴル人民共和国、共産圏に托するという戦略的な政策をとったのだと思います。ですから、カンジュルジャップと川島芳子は政略結婚でした。ただ、カンジュルジャップは非常な美男子で、気立ても

よく、押しつけの結婚でしたが、川島芳子もきらいではなかったようです。

カンジュルジャップと離婚した後の川島芳子は生活が少し乱れたといいますが、親の川島浪速のいうことも聞かず、自由奔放に遍歴します。しかし、一貫しているのは、粛親王と川島浪速の意向を受けて、清朝復辟を盛り上げていこう、日本の傀儡といわれようが、辛亥革命でつきた孫文たちの中国、共和国ではなく、自分たちロイヤルファミリーの拠点を、故地である中国満州の地にもちたいという点です。ですから自由奔放な生活を送りながらも、日本と満州国軍の私的別働隊としてのゲリラ活動をする「定国軍」という私兵部隊をつくって司令（隊長）として活動していました。

満州事変が起こった後、日本はあつという間に満州を席卷して占領してしまいます。石原莞爾のシナリオが周到に書かれていたからでしょう。大きな口径の大砲を密かに日本から持ってきて、奉天のしかるべき場所に据えて、北大營の国民党政府軍の司令部に照準を合わせて弾を込めていました。満州事変が起きるや、これは中国人の仕業であると称して、居留民を保護するという口実で国民党軍を攻撃する際、すでに合わせておいた照準

の引き金をひいて、それから戦争が始まりました。

甘粕正彦は、ハルビンで現地の暴民が暴動したという事件をでっちあげて内乱を起こし、関東軍が進行しやすいようにしました。数の少ない関東軍があつという間に満州を占領して、満州国という国をつくった。日本の軍隊が国をつくるということは、諸外国から国際法上非難を浴びかねないので、日本が中心になって、満州族と漢民族とモンゴル族と朝鮮族の「五族協和」で「王道楽土」を創るという理念を掲げました。

国際連盟に国家としての認知を求めますが、国連のリットン調査団はそれは認めず、満州国は国際法上は承認されない国家になりました。それから日本は独自の道を歩んだわけです。

その時、甘粕正彦は天津に幽閉された形で逼塞していたラストエンペラー、愛新覺羅溥儀を拉致に等しいやり方で長春まで連れていった。一方、川島芳子は、婉容という溥儀の皇后を拉致して、天津から貨物船に乗せて満州まで連れていくという秘密工作をします。

そのあたりから、川島芳子は「東洋のマタハリ」「スパイ」「ゲリラ活動のリーダー」と呼ばれるようになります。

ご存知のように彼女は断髪で、正式な時は軍服姿でしたから、それでますます有名になります。マタハリというのは、彼女が最終段階でスパイとして逮捕され裁判にかかったあたりから「東洋のマタハリ」と言われるようになりました。川島芳子自身は「東洋のジャンヌダルク」と言われることを非常に好んだようです。

「男装の麗人」とも呼ばれました。これは村松梢風が、彼女がゲリラ活動をしている時に、このタイトルで小説を書きベストセラーになったところから、彼女の逸話が虚実入り混じって日本国中に流布されていきます。川島芳子がどうして奔放な行動をとるようになったかという説があり自棄になったとか、いろいろな説がありますが、ある恋愛事件が理由との解釈もあります。

そのひとつに、信州松本に駐屯して連隊旗手を務めていた山家亨少尉との恋愛事件があります。満州浪人の青年何人かとのうわさ話もあります。山家亨はいわゆる支那通のエリート軍人の一人で、東京外国語学校で中国語とモンゴル語を勉強し、そちらの方面の将来のリーダーとして養成されていました。彼自身も満蒙復辟に共鳴していたので、川島家に入力していました。軍隊が松本に駐屯して

いて、行き帰りに川島芳子と会ったことから、二人は恋に落ちたといわれております。

彼女はある別のスキャンダルで自殺を図ったこともあるようです。そのころから彼女の行動に虚言癖が伴うようになります。川島芳子の場合には生涯を通じて、嘘と真実が入り混じっているものであって、だから後に調べる人が困惑してしまうのです。

ただ、彼女が書いたものを読むと（日本語で書いたものが大部分ですが）、ひたすら日本のこと、中国のことを考え、満州族のことを考えていたようです。日本で幼いころから生活していたので、日本人のメンタリティーを受け継いでいますから、日本画に対する造詣とか、茶の湯に対する好みとか、武士道の精神の勉強とか、ふつうの中国人よりは、日本人に対する理解が深い女性として成長していったのではないかと思います。

もう一人のエンタ

1937年、昭和12年に、山口淑子さんは17歳でした。そのころ北京に留学していました。北京の翊教という良家の子女だけが通うミッションスクールに通い、

潘さんという政治家の義理の娘として、そこに寄宿していました。その学校は、中国人の子女だけの学校でしたので、潘淑華という名でその女学校に通いました。潘さんは親日家の財界人兼政治家で、日本に反対するだけではなくて、中国と日本と仲よくして何とかやっていけないか、という考えの人でした。

盧溝橋事件が起きて、日本軍は中国の本土のほうに進出していきますが、中国人は労働者と学生が共同で大デモンストレーションを起こします。翊教女学校の学生すらデモを起こし、山口淑子もいっしょに抗議集会に参加しようと誘われます。その頃、南京の国民党政府とは別に、日本の傀儡とまではいえませんが、両国仲良くという考えを持った中国人が中心となった暫定政権が河北省にできました。その暫定政権の内閣官房長官が潘



山口淑子

さんでした。

ある夏休みに、潘さんの娘3人と山口淑子さんは、天津でひと夏を過ごします。そこに川島芳子の経営する東興楼という店がありました。料理屋のような、小さいホテルのような、軍隊のアジトのような所でもあって、従業員に若い青年が約50人いて、事あらば金壁輝（川島芳子）將軍率いる「定国軍」というゲリラ隊に姿を変えて活動に乗り出すという、構えをとっていました。

その東興楼で開かれたパーティーに、山口淑子さんはお父さんに連れられて行ったのが二人のヨシコの最初の出会いです。その後、二人は陰に陽に、折りにふれての関係が断続的に続きます。

山家亨は、その後、北支那派遣軍の広報担当係になり、広報と諜報と兼ねていました。ですからスパイの親玉みたいな仕事もやれば、一方では広報担当として、文化政策も責任をもっていました。ちなみに山口淑子さんが、李香蘭という名前で満州映画協会ができた翌年にスカウトされ、その女優になったのも、山家亨の画策があったからです。

山口淑子さんは、胸の病気を治すために声楽を勉強しており、モスクワ歌劇団のプリマドンナだった人に、2日に1度

くらい声楽を習っていました。彼女としては治療に通っていたのですが、そのうちにマダム・ボゾレソフというそのソプラノの名歌手が、山口淑子さんの才能に驚き、年に1度、奉天（現瀋陽）の大和ホテルでリサイタルを開く時、必ず彼女を前座に出した。それに目をつけたのが、奉天放送局の東さんという課長さんで、ぜひ奉天放送局の「満州新歌謡」という番組に出演してくださいと頼んだ。

「満州新歌謡」は満州に古くから伝わる民謡だけでなく、流行歌、日本の歌、中国大陸で流行っている歌を取り混ぜた30分番組で、最も人気を博したラジオ番組です。そこで彼女が歌うようになって、満洲にいる中国人の間では、李香蘭という歌手として有名になりました。そこで山家亨は、彼女が北京の女学校を卒業する間際に、北京に赴いて、「今度、満州映画協会ができて、映画を撮るのが出演してくれないか」と誘い、彼女は「そんなことはできません」と断りますが、「映画といったって、姿形を映すわけではない、奉天で歌っている歌がすぐ評判がいいから、映画の中で歌を歌ってほしい、他の俳優に演技はさせるから、吹き替えで歌声だけでいいんだ」とか、何とかごまかしながら、出演させてしま

ます。

その時に、日本から満映をつくるために来ていた監督がマキノ雅弘さんで、最初の映画は「蜜月快車」、ハネムーントレインという映画でした。新婚の花嫁さんが新婚旅行の列車の中で騒ぎを巻き起こすコメディです。山口さんは歌だけを歌うはずだったのが、実写をされてしまい、彼女は今でも「マキノ雅弘さんにだまされたわ」と言っています。彼は何語だか分からない「かめへん、かめへん」と言いながらカメラを回したそうです。それが李香蘭の映画女優としてのデビューでした。

川島芳子はやがて映画女優としての山口淑子、李香蘭のファンになります。川島芳子は、婉容皇后を満州まで連れ出し、ゲリラ活動、拉致活動をして、満州国建設のために様々な功績をあげて、満州国ができる、女官長を務めるのですが、そんなお役人にとどまるような器ではなくて、本格的なゲリラ活動に挺身していきます。昭和7年、上海で田中隆吉とねんごろになり、いっしょに上海事変を起こします。日本人の日蓮宗のお坊さんたちを襲ったのは中国人だというふうにみせかけた事件です。

山口淑子が天津の東興楼で、1937

年に出会った時には、川島芳子はかなり貫禄をつけたスパイの女親玉になっていました。しかし彼女自身、いろいろな病気もしましたし、麻薬にもおかされていて、その治療をする必要もあったようです。

昭和20年の敗戦までの10年近くは、病身の身を休めて、九州の温泉に療養に來たりしています。そういうことを繰り返しながら、きちんきちんと恋愛事件は起こしているし（笑）、人からお金をかすめとったと訴えられる詐欺事件も起こしているのです、相当な人物だったと思います。

晩年、彼女の恋人として彼女をサポートしたのは笹川良一さんでした。私も笹川さんのところに行つて、取材しましたし、山口淑子さんからも聞きましたし、最近、工藤美代子さんが笹川良一の伝記を書いていますが、そこにも書かれています。

新たな生存説

あらためて川島芳子の生存説ですが、最近俄かに騒がれ出したのは、信濃毎日新聞の記事がきっかけです。その記事は平成20年11月16日付ですが、話は平成11



方おばあさんの写真模写

年の11月16日から始まっています。北京にいる時事通信の特派員が私に電話をかけてきました。長春の『新文化報』に川島芳子が生きているという説が載っているが、これまでの説と比べて非常にリアルだということで信憑性を確認してきたのです。

会ったこともない記者でしたが、私も時事通信の記者をしていましたので協力し、できあがったのがその新聞記事です。彼が配信した記事です。「——長春で1978年まで生きていたとする証言が飛び出した」というものです。

証言をしたのは張鈺という女性の画家、当時41歳の人です。この人のお母さんは日本人の残留孤児でした。そのお母さんを養女としたのが、段連祥という男性で、2004年末に86歳で死亡しています。そして長春の郊外に住んでいた時いっしょ

に住んでいたのが「方おばあさん」と言われる人でした。

この画家の女性は小さいころから、方おばあさんと段連祥さんは愛人関係にあったと世間ではいわれていて、それを誰もおかしいとか変だとはいわずに認識していたそうです。段連祥さんが死ぬ時に、実はということ、1978年まで生きていた方おばあさんは、あれは実は川島芳子という人だったんだよ」という証言を遺しました。

彼は死ぬ間際に張鈺を呼び寄せ、壁の絵を指し、「方おばあさんがおまえに描いたもので記念にするように」と言った。

この絵は、日本の女性が裸になって湯浴びをしている絵で、方おばあさんが張鈺さんに日本画の描き方を教えていたという証言もあります。また方おばあさんの遺品の中に、七宝焼きの獅子像とか、フランス製の双眼鏡とか、李香蘭が吹き込んだレコードとか、それを回す蓄音機とか、いわゆる証拠品もあると記事に書いてあります。

コメントを求められた松本の穂苺さんはそのことだけではよく分からない、と言ったのですが、実は後になってこの七宝焼きの獅子像の中から、小方八郎という、晩年まで川島芳子の世話をしていた、

若い男性の秘書にあてた手紙も入っていたことが分かった。小方八郎さんは、川島芳子が死刑になった時に、遺骨を古川大航さんというお坊さんといっしょに引き取りに行った人ですが、その後、日本に帰っておりました。

方おばあさんの左胸には褐色の傷があったようです。歴史的な記録によると川島芳子はゲリラ活動をしている時に弾丸を左胸に受けて、それが体内に残ったことから北京で手術を受けて、脊髄炎を患っている。その傷と同じ場所であるとか、様々な証言ができています。

一方で、死刑そのものに対する疑いもじつは最初からありました。

中国の処刑は見せしめという意味合いがありますので、大勢の前で執行するのが通例です。川島芳子は漢奸（祖国反逆者）として見せしめにするだけの十分なモデルだったにもかかわらず、朝の6時40分ごろ、まだ暗いうちに執行され、一般人の目前ではなかった。

また駆けつけた新聞記者は「ライフ」のカメラマンだけで、処刑シーンではなく、遺骸だけを撮影した。小方八郎さんですらおかしいと言っていたのです。彼女は断髪にしていたし、刑務所にいた時はさらに短くしていたのに、この遺体の

髪は長いと、毎日見ている秘書がおかしいと、と言っていたことも、生存説を裏付けています。

遺体の写真を見ると、後頭部から銃殺され、跪いた形で撃たれたのでしょうか。顔は血まみれで、容貌がぐちゃぐちゃになっ

て見分けられないので、川島芳子ということが分かるはずもない、決定的な証拠がないということでした。

そうこうしているうちに、いろいろな調査の結果、先ほどの金の延べ棒の件を訴え出た人がいた。

劉鳳貞さんと名乗る、その女性が当局に言ったことは、「私の姉は劉鳳玲という名前、金壁輝に似ており、日本語ができました。私の母親は監獄で働いていた親戚の口車によって、不治の病だった姉を、金の延べ棒10本で売ってしまいました。死刑執行の前日に、姉を獄舎に送り届けると、監獄長は金の延べ棒4本を渡し、残りは後で渡すと言いました。抗議をするとお前たち3人とも殺してしまおうぞ、と脅かされて泣く泣く家に帰ってきました。その後、母親が金の延べ棒の催促に行きましたが、いまだに母親は家に帰ってきておりません。調べてください」と訴えたわけです。

日本に調査にきた吉林省の社会科学学院

の研究員に聞いた話などを総合しても、蓄音機と「支那の夜」のレコードから見ても、山口淑子さんは信憑性があるのでないかと言います。穂荅甲子男さんも山口淑子さん、生存の可能性はフィフティフィフティと言っています。

いろいろな調査の結果から分かったことは、この方おばあさんは、1年のうち半分は長春の郊外で張鈺さんたちと生活を共にし、段さんの庇護を受けていた。冬は南方の浙江省の国清寺というお寺で過ごしていた。国清寺は中国の天台宗の総本山の資格をもつ立派なお寺で、そう簡単に一般人は行けないのですが、そこで非常に手厚い待遇を受けていたそうです。

方おばあさんは仏教の信者で尼さんのような服装を長春でしていることも多く、国清寺に行っている時には、国家の庇護を受けていたのではないかと、毛沢東も知っていた、周恩来はよく知っていて、保護するように指示していたという説が強くあります。私は最初、生存の可能性は20〜30パーセントと思っていたのですが、ここまでくると穂荅さんや山口さん同様、フィフティフィフティかなと思うに至っております。

アイデンティティーとは

李香蘭を調べている時もおつくづく感じたのですが、川島芳子の新しい説が出てくるにつけても思うのは、人間のアイデンティティーということですね。山口淑子は日本人に生まれながら、中国名で日本の文化政策のために、満州国建設のために利用されて、自分はいったい何なのかと常に悩んでいたからこそ、友人に日本に抗議するデモに参加しようと言われた時もおんなじな気分だった。

一方で、長谷川一夫と日本を宣伝する映画に出演すると、同僚の中国人の女性から、どうして中国人を侮辱するような映画に出演するの？と言われて、いたたまれなかった。

そこで昭和19年に甘粕理事長（満映二代目の理事長）に辞表を出したら、「これまでよくやってくださいました、ありがとうございます」と辞表を受け取った。もう一人の映画人で東洋のハリウッドと言われる上海で中華電影の総経理というか董事長をやっていた川喜多長政の元に入って、女優として再スタートしたのですが、そのころ時局は風雲急を告げていて映画をつくるどころではなくなって、最後

に撮ったのが「萬世流芳」という映画だったと思います。

日本が負けた後、彼女は中国人のくせに日本人に魂を売り、操り人形として、中国人に不為をはたらいたという、漢奸罪、漢民族を裏切った罪、祖国反逆罪で起訴され、死刑を求刑されますが、彼女の身元を証明する戸籍謄本が証拠品として提出され、日本人であることが立証された。佐賀県生まれの山口文雄と、福岡県生まれのアイの間に生まれた日本人であるという証拠が出たからには、祖国反逆罪にはあたらない、ということが無罪。しかし中国人を侮辱したという道義的な責任はあると、日本へ強制送還処分になりました。

一方、川島芳子は、自分は中国で生まれたけれど、川島浪速の養女になって日本人になったから、中国を裏切ったことにはならない、祖国反逆罪にはならない、と抗弁しますが、松本の川島浪速は戸籍謄本を送ることができなかった。籍が入ってなかったのです。様々ないきさつが親子にはあって、お兄さんが「芳子が断髪したのは父親に強姦されたからである」と書き残していますが、これが有力です。いろいろな親子を含む愛憎の問題と日本と中国、満州を含める様々な人間関係

の愛憎のドラマの中に二人は生きてきました。

先ほどアイデンティティーと言いましたが、川島芳子の場合には中国人として生まれながら、日本人の養女になり、山口淑子と同様に満州国建設のために奔走した。一人は無罪放免になり、日本に帰ってきて新たなスタートを切り、女優として、ジャーナリストとして、政治家として、2回も3回も生きて、今日、91歳の長寿を全うしている。

ところが死んだと思ったはずの川島芳子も生きていたというわけです。さて、アイデンティティーの問題をどう考え直すべきか、考え続けるべきか、私は今、考え悩んでおります。ご清聴、ありがとうございます。

（9月6日・東北フォーラム）

講師略歴（ふじわら さくや）

1937年仙台市生まれ。終戦時はソ連軍に追われて、中国東北部を脱出。1962年東京外国語大学フランス語科卒。時事通信社入社。経済部記者。1998年日銀副総裁。当協会理事。著書『李香蘭』など。